

日本における高齢者の友人関係に関する研究動向

野邊 政雄 ・ 大須賀 翼*

近年、日本において高齢者の友人関係について熱心に研究が進められるようになった。本稿では、日本における友人関係に関する研究を紹介しながら、高齢者の友人関係についての研究動向をまとめた。

Keywords: 高齢者, 友人関係, パーソナル・ネットワーク, 研究動向

1 本稿の目的

高齢者の社会関係は、社会老年学のなかでも主要なテーマの一つである。日本においては、高齢者の社会関係について家族関係が中心的に研究されてきており、友人関係についてはあまり取り上げてこれなかった。しかし、近年では、高齢者の友人関係について、熱心に研究が進められるようになった。本稿では、日本における友人関係に関する研究を紹介しながら、高齢者の友人関係についての研究動向をまとめてゆく。

2 方法

本稿のデータ収集としては、主に財団法人ダイヤ高齢社会研究財団のなかにある社会老年学文献データベース (<http://www.dia.or.jp/dial/>) をもとに、高齢者の人間関係について雑誌論文を収集していくという形をとった。このデータベースには『老年社会科学』をはじめとする社会老年学関係の論文を掲載する主要な学術誌を網羅している。ゆえに、重要な論文はほぼすべて取り上げられていると考えられる。これをもとに、高齢者の友人関係についての研究動向をまとめていった。

3 高齢期の友人関係の特徴

ここでは、先行研究をもとに、高齢期の友人関係の特徴について、明らかにしていきたい。

前田尚子(1988)は、親子関係と比較しながら老年期の友人関係について、次の3つの特質を指摘した。

①親子関係は当事者に選択の余地がない帰属的な関係であるのに対し、友人関係は相互の自発性に基づく自由選択によって結びつけられた選択的な関係である。この特質から、前田は友人関係の価値観の類似性(属性同質性)、持続性、地域性、対等性という4つの特質が派生的にもたらされるとしている。
②共同生活体験をもつ親子関係に比べて、共同生活体験をもつことが困難である友人関係は、全人格的に結びついた関係を成立させることが困難である。
③親子関係は頼りになる反面、拘束的な関係であるのに対し、友人関係は単なる私的な関係であるため、フォーマルな役割期待から解放された気楽な関係である。ちなみに、小田利勝(2003)も友人関係の③の特質を指摘している。すなわち、彼によれば、友人関係は本人の意向に沿って取り結ばれるという点で、他の社会関係に比べて選択の余地の大きいものであるという。

また、前田は、「老年期における友人関係の機能は、老人がその友人関係を維持することによっていかなる欲求充足を得ているかによって捉えられる」(前田 1988: 63)と述べ、友人関係の機能について分析している。老人の主な欲求としては、経済的安定欲求、保健欲求、情緒的反応欲求、価値欲求がある(森岡・望月 1983)。これにもとづいて、前田は、友人関係は情緒的反応欲求と価値欲求の充足に寄与しているが、経済的安定欲求や保健欲求の充足に対する寄与は乏しいとしている。具体的に言えば、友人関係は余暇活動のパートナーや日常的な悩みごと

の相談という機能を主に果たしているということである。前田の研究は、日本における高齢者の友人関係のなかでもかなり初期のものである。当時、高齢者の友人関係についてそれほど研究が進展していなかったため、高齢者の友人関係の特質については、当時でも既に盛んに研究がおこなわれていた親子関係との比較のなかで明らかにしている。

前田の研究において明らかにされた高齢者の友人関係の特質は、やや一般的で抽象的なものとなっている。そこで、ここからはもう少し焦点を絞って高齢者の友人関係の特徴を明らかにしている研究をレビューしていきたい。

西下彰俊(1987)は、友人ネットワークの有無や数に対して、家族関係や親族関係がどのように影響するのか、影響を及ぼさないとすればどのような要因が大きく影響しているかという問いを立てた。そして、まず高齢女性の最も親しい友人のプロフィールを示し、次に親しい友人の有無やその人数に影響を及ぼす諸要因を明らかにするという形で研究を進めている。そのうえで、彼は以下の4点を明らかにした。①高齢女性の親友の性質としては、同性である女性が圧倒的であり同じ年齢層に属する人が多い。②知り合うきっかけは近所同士であるという住縁・地縁が最も多く、親友が5分以内に住んでいる人が6割近くを占める。そのうち、ほとんど毎日会うというつきあいが半数を越し、会話・相談、おすそわけなどを中心に多面的な接触をしている。③高齢女性が友人とできる限り多く接触する活動的、社交的生活に重点をおいているほど、趣味の数が多いほど、親しい友人が存在し、その人数が多い。逆に、ひとりで気楽に生きる離脱的、非社交的生活に重点を置いているほど、趣味が全くないほど、親しい友人が無いか少ない。④夫との関係や兄弟姉妹との関係は友人関係にほとんど影響がなく、最も頼りにしている子どもとの距離やその子どもからの訪問頻度が友人関係に強い影響力をもっている。

古谷野亘ほか(2000)は、大都市に居住する60~79歳の男性高齢者に同居家族と別居子・別居子の配偶者以外で「おつきあいのある方」を最大15人まであげてを求め、その一人一人について基本属性と交流の経緯、現在の交流の態様を尋ねた。この調査データの分析によって、彼らは次の3点を明らかにした。①回答者が「おつきあいのある方」としてあげた他者は1人平均4.7人であり、他者のほとんどは男性の友人で年齢的には多くが同年輩であった。②他者と知り合う機会には性差があり、高齢女性では「近隣」、男性では「仕事」の比重が高い。③他者は手段的サポートの源泉としてはあまり期待できない

存在であるが、情緒的な交流の対象としては、男性高齢者の社会関係のなかで重要な位置を占めている。

その後、古谷野はこの研究をさらに発展させた研究(古谷野ほか 2007)をおこなっている。この研究においては、前述の調査(古谷野ほか 2000)のように「おつきあいのある方」を尋ねるのではなく、「気心の知れた仲だと感じる方」を質問した。調査データの分析によって、彼らは次の5点を明らかにした。①回答者が気心の知れた仲だと感じる人として挙げたのは、ほとんどが友人であった。②その友人の年齢については、同年輩の人が多い。③他者と知り合ったきっかけは近所、学校、職場の順が多い。④他者には比較的近くに住んでいる人が多い。⑤気心の知れた人はいないと回答した者の割合は女性より男性が多い。この研究において、回答者が気心の知れた仲だと感じる人として挙げたのはほとんどが友人であったから、これらの点は高齢者の友人関係についての特徴といえる。

矢部拓也ほか(2002)は、都市の男性高齢者が現在交流を有する他者とどのようなきっかけで知り合い、知り合ったのちに関係の重複をどの程度経験しているかを調査した。そして、知り合ったきっかけとその後の経過の分析をとおして、都市男性高齢者の社会関係形成のメカニズムを解明しようとした。彼らが明らかにしたことは、次の2点である。①他者と知り合ったきっかけは多い順に「職場・仕事を通じて」、「同じ学校」「兄弟姉妹・親戚」となっている。②他者と知り合った後に、知り合った契機とは別の関係の重なりが認められることから、社会関係の形成に対する関係の重複の寄与が示唆される。この研究において、趣味の活動や飲食店等の常連であることは、社会関係の発生の契機としてよりも、関係継続の契機として重要であった。社会関係というと現在の社会関係のあり方に目が行きがちである。しかし、この研究は、高齢者が相手と知り合ったきっかけおよびどのような過程を通じて社会関係を維持してきたかを解明したという点で、独自性がある。

古谷野ほか(2005)は関係の重複が現在の交流に及ぼしている影響に焦点を当て、関係の重複が現在の交流をより密なものにしているか否かを検討した。そして、彼らは次の2点を明らかにした。①関係の重複の程度によって、現在の交流が異なり、関係の重複が多い他者ほど親密な交流をもつ傾向にある。②関係の重複が多い他者ほど、共通の体験に基づく情緒的な親密さを感じるが多く、また家族ぐる

みの付き合いをしたり、手段的サポートの提供者になったりする。古谷野ほかによるこの研究は、矢部ほか(2002)の研究と同様の手法を取りつつ、研究をさらに進め、関係の重複が人間関係にどのように影響を与えているのかを解明している。

大森純子(2005)は、前期女性高齢者が家族以外の身近な他者と日ごろ交流することをなぜ必要とするのか、彼女たちが直面している現実とはどのようなものかを明らかにするために、実際にそこではどのような行為が取り交わされ、そこから何を得ているのかについて質的に記述し、その交流関係を研究した。大森は、「日ごろからお付き合いのある方はいますか」「その方とはどのような間がらですか」などのように回答に制限を設けずに質問し、日ごろの家族以外の他者との交流関係について自由に語ってもらうインタビューを個別におこなっていくという方法でデータを収集している。この調査で大森が明らかにしたことは、以下の2点である。①前期高齢女性は、同年代の境遇を分かち合う、互いの日常に関心を寄せ合う、日常的な交流を継続させる、適度な距離感を保ち合うという4つの気遣い合い的日常交流をしている。②気遣い合い的日常交流には、自分の居場所が見いだす、今日を生きる意欲を得る、いまの自分が確かめるという3つの目的がある。これらの2点を踏まえて、大森(2005)は、高齢女性の家族以外の身近な他者との交流について、以下のよう

同年代の境遇を分かち合い、互いの日常に関心を寄せ合いながらも、互いの尊厳を侵さないよう適度な距離感を保ち合い、日常的な交流を継続させる相互行為を通じて、自分の居場所を見だし、今日を生きる意味を得て、いまの自分を確かめることができ、日々を充実させて自分なりの人生を生きることができていた。(大森 2005: 303)

大森の論文は、高齢女性が家族以外の身近な他者との交流を積極的におこなっていくことの意味を考察している。この研究から、行為の意味を探っていくためには質的方法が有効であるということ指摘することができる。

ここまでに見てきた高齢者の友人関係に関する研究とは少し異なり、パーソナル・ネットワークという視点から、高齢者の社会関係をとらえている研究も存在する。詳細は省略するが、柳信寛(2001)の研究や広田すみれ(2003)の研究が具体的な研究として挙げられる。

4 友人関係を従属変数とした研究

ここでは、友人関係を従属変数(結果)としてとらえた高齢者の友人関係の研究についてレビューをおこなっていきたい。

前田(1988)は、世帯類型と性別が友人関係にどのように関連しているかを明らかにしている。まず、世帯類型と友人関係の関連について。これについて前田は、老夫婦のみ世帯と同居世帯とで比較をおこない、以下の2点を明らかにした。①同居老人と比べ世帯内の人的資源が脆弱な老夫婦のみ老人にとって、社会的孤立の回避および日常的援助という面から友人関係の重要性が高まっている。②老夫婦のみ老人にとって友人関係の重要性が高まっているとはいえ、友人関係の保健欲求充足機能はあくまでも緊急時・短期間にとどまるものである。

次に、性別と友人関係の関連について。これについて前田(1988)は、以下の2点を明らかにした。①女性老人の友人との付き合いの契機は、「近所付き合い」に集中しているのに対し、男性老人の友人との付き合いの契機は、「仕事を通じて」も多い。②男性老人の友人付き合いの内容は共に楽しむ活動に集中しているのに対し、女性老人の友人付き合いの内容は共に楽しむ活動以外にも「悩みごと相談」「相互訪問」「食料品のやりとり」など相互援助活動がおこなわれており、付き合いが多面的に展開されている。

さらに、前田(2004)は、友人関係が形成された社会的文脈と継続的期間の性差を明らかにし、これらの関係特性が関係の機能に及ぼす影響の性差を分析する研究をおこなっている。彼女がこの研究で明らかにしたことは、次の4点である。①友人関係の形成の文脈は女性のほうが多様である。②友人関係の継続期間は、女性よりも男性のほうが長い。③友人関係の文脈と機能の関連パターンには性差がある。具体的には、男性の場合、主な機能は仕事を通じて形成された友人関係から引き出されているが、女性は機能の内容に応じてさまざまな文脈から機能を引き出している。④関係の継続期間と機能の関連は男性のみに現れ、継続期間が長くなるほど情緒的機能を果たしていた。この研究において重要なことは、前田(2004)が以上の4点をライフコースの性差によって説明したことである。

原田謙ほか(2003)は、東京のインナーシティに居住する後期高齢者のパーソナル・ネットワークと社会階層(学歴、最長職の従業上の地位、所得、住宅階層)の関連を明らかにする研究をおこなった。彼らは、この研究で次の4点を明らかにした。①インナーシティに居住する後期高齢者の住宅の種類は、

学歴・所得といった社会経済的地位の格差を反映している。②学校というライフコースの早い段階において築かれた友人関係が後期高齢期においても維持されている。③雇用者に比べて自営・無職の者は近居子がいる確立が高く、自営業層が異居近隣関係を維持している。④所得が多い者のほうが、親族総数および中距離親族・友人数が多い。

原田ほかの研究は、社会階層が高齢者の社会関係にどのように影響を与えているかを明らかにしている研究である。しかし、この研究は、社会階層が友人関係に与える影響についても触れられているが、そこに焦点を絞っているわけではない。社会階層を独立変数にした研究はあまり見られないので、今後、社会階層が友人関係にどのように影響を与えているかに焦点を絞って研究を進めていく必要がある。

小田(2003)は、性や年齢といった人口の属性、学歴(就学年数)、世帯形態、職の有無、家計水準(所得と支出)といった社会的属性、自由時間およびクラブやサークル、各種団体等での参加・活動の程度、主観的健康観や生活全般の満足度、主観的老化度、積極的親密性を独立変数とし、これらが友人関係にどのような影響を与えているかを追究している。この研究において、小田は友人関係を関係の内容と親密さの程度により7つに分類している。それらを順に並べていくと①年賀状の交換②お祝い事をしたりされたりする③お茶を飲んだり食事をする④一緒に遊びや旅行に出かける⑤訪問したりされたりする⑥相談ごとや悩みごとを話したり聞いたりする⑦金銭の貸し借りや保証人になったりなってもらうとなる。以上のような枠組みのもとで研究を進めた結果、小田は以下の3点を明らかにした。①全般的に言えば男性の方が女性よりも友人を多く持っているが、男性の方が女性よりも友人の数に関して個人差が大きい。②多くの付き合い内容に共通して友人数を増加させる方向に有意に作用している要因は、性別、各種のクラブやサークルなどに参加して活動している程度、対人関係に関わる自己概念として取り上げられた積極的親密性、家計水準である。③友人数を阻害する方向に働いている要因は、日常活動老化度である。小田が開発した友人関係の親密さの測定方法に、彼の研究の独自性を認めることができる。

5 ソーシャル・サポートについての研究

浅川達人(2003)の定義をもとに、ソーシャル・サポートの概念について述べていきたい。ソーシャル・サポートという概念は、他者との間で取り交わされる様々な支援や援助という意味で用いられており、他者たちとどのような関係をもっているかとい

うことを示す概念である。ソーシャル・サポートについては、多くの研究では、情緒的サポートと手段的サポートに分けて考察されている。ここでの情緒的サポートとは慰める、励ます、悩みを聞くなどの行為を指し、手段的サポートとは作業を手伝う、物や金銭を貸す、看病をするなどといった行為を指している。情緒的サポートと手段的サポートとを比較すると、情緒的サポートの場合はサポートを提供する人の負担が少ないのに対し、手段的サポートの場合はサポートを提供する人に一定の負担がかかってくるということがその違いとして挙げられる。

ソーシャル・サポートの定義については、浅川(2003)の定義が一般的なものである。しかし、他にも多様な定義の仕方がある。それをここからは紹介しておきたい。野口裕二(1991a)は、情緒的・手段的の分類にポジティブ・ネガティブという分類を組み合わせている。河合千恵子ほか(1992)は、サポートのタイプを生活、物質、情緒の3タイプに分類している。浅川達人ほか(1999)は、高齢者の社会関係を構成するものとしては、「サポート」と「情緒的一体感」という2つの次元が抽出し、「情緒的一体感」がより基礎的な次元であるということを示している。浅川ほか(1999)の研究を踏まえて、西村昌記ほか(2000)は、高齢期の親しい関係を「交遊」「相談」「信頼」の3種の関係によって操作的にとらえ、「交遊」を「情緒的一体感」の次元、「相談」を「情緒的サポート」、「信頼」を「手段的サポート」と重なることが多いとしている。ソーシャル・サポートの概念や定義はあいまいなものである。このソーシャル・サポートの概念と測定について焦点を絞り、研究を進めていったものとしては、野口裕二(1991b)の研究がある。しかし、ソーシャル・サポートの概念や定義を明確化できたとはいえない。この点、もう少し統一的な定義を定着させていく必要がある。

さて、高齢者がサポートを入手する相手をどのように選択するかについては「階層的補完モデル」と「課題特定モデル」があるが、これらのモデルで、友人関係はどのように捉えられているかを見ておきたい。階層的補完モデルとは、高齢者はサポート提供者として親族を最も好み、次に友人や近所の人、最後に公的枠組みを好むとされているというものである(Cantor 1979)。すなわち、サポートの種類にかかわらず、高齢者がサポートを求める相手には序列があり、優先順位の高い人、低い人が存在するということである。このモデルにおいて、友人は親族に比べると優先順位の低い存在であるとされている。これに対し、課題特定モデルというのは、ある

課題にはそれに適した間柄の人がおり、その人にサポートを求めていくというものである (Litwak & Szelenyi 1969)。このモデルにおいて友人は、情緒的サポートの提供者になる可能性が高いが、手段的サポートの提供者とはなりにくいとされている。

日本においては、階層的補完モデルの実証的研究はいくつかおこなわれている。具体的には、古谷野ほか(1998)、野邊政雄(2005)、小林江里香ほか(2005)の研究である。これらによって、階層的補完が一部の関係にはみられるということや主に手段的サポートに階層的補完が見られるということ、親族のサポートを友人が補完するには限界があることなどが明らかにされている。そのうえで、サポートの全体的な仕組みや傾向性が明らかにされている。一方、課題特定モデルを検証することを主眼にした実証的研究は、日本においてはほとんどおこなわれていない。ただ、古谷野ほか(2000)、西村ほか(2000)、野邊(1999)の研究は、今後の日本における課題特定モデルの研究に示唆を与えてくれるものであると思われる。彼らは、友人が「交遊」という情緒的な面でのサポートに大きな役割を果たしているということを明らかにしている。具体的には、古谷野ほかの研究では、友人は手段的サポートの源泉としてはあまり期待できない存在であるが、情緒的な交流の対象としては男性高齢者の社会関係のなかで重要な位置を占めていた。西村ほかの研究では、「交遊」のように日常的な接触や関心の共有を必要とする関係として、非親族である友人・知人が選択されることが多かった。野邊の研究では、友人はそれほどサポートの提供において重要な役割を果たしていないが、「交遊」の面では重要な役割を演じていた。

6 友人関係を独立変数とした研究

ここでは、友人関係を独立変数(原因)とする研究についてレビューをおこなう。具体的には、高齢者の友人関係が主観的幸福感に与える影響についての研究動向をまとめる。

玉野和志ほか(1989)の研究は、日本における高齢者の社会関係が主観的幸福感に与える影響について焦点を当てた研究のなかでも初期のものである。玉野ほかは、配偶者との関係、子どもとの関係に比べれば、友人関係など、それ以外の社会関係が主観的幸福感に与える影響が小さいことを明らかにした。

古谷野亘ほか(1995)は、ソーシャル・サポートとソーシャル・ネットワークを社会関係の指標とし、都市の中高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼす要因を解明する研究をおこなった。彼らは社会関係の指標として、親戚・近隣・友人ネットワークと親

戚・近隣・友人からの情緒的サポートを用いている。そして、彼らは、主観的幸福感に対する直接効果が認められた変数は、活動能力、最長職威信スコア、同居既婚子と配偶者の有無、友人ネットワークの5つであるということを示した。この研究では、友人関係が主観的幸福感に少なからず影響を与えていたといえる。

7 考察

ここでは、ここまでに見てきた高齢者の友人関係に関する代表的な研究から、高齢者の友人関係の研究動向について3つのことを指摘しておきたい。

第1に、研究方法について述べたい。ここまでに見てきたことからわかるように、高齢者の社会関係の研究においては、アンケート調査を中心とした量的方法が中心的に用いられているということである。ここで量的方法と質的方法の特徴について押さえておくと、量的方法は、ネットワークの構造がどうなっているかということやサポートの構造がどのようになっているかということを示すことができるという側面が強いのに対し、質的方法は、なぜそのような人間関係を結んでいるのかという行為の意味を深く考えていくことができる研究方法であるといえる。

今回見てきた研究のなかで、量的方法を用いた研究については、それぞれの先行研究がお互いに関連しあいながら、着実に研究成果を積み上げていっていると言えることができる。それに対し、質的方法を用いた研究については、今回、大森(2005)の研究しか発見することができなかった。量的方法と質的方法のどちらが優れているかということは一概に言うことはできないが、それぞれの方法を用いた研究がお互いに関連し合いながら発展していくということを考えると、今後、質的方法を用いた研究の成果が積み重なっていくことが求められる。

第2に、階層補完モデルと課題特定モデルについて述べたい。これらの研究では、特に、課題特定モデルの研究を日本において進め、どの程度課題特定モデルがあてはまるかを検証していく必要があるのではないかと考えられる。また、具体的なサポートの相手を決めて、そのサポート相手とのサポートのやりとりがどのようにおこなわれているかということの研究していくことも必要である。

第3に、友人関係を中心テーマに置くことの重要性について述べたい。今回のレビューにおいては、主に高齢者の社会関係を主たるテーマとした論文のなかで、友人関係についてどのようなことが明らかになっているかということを取り出し、まとめてき

た。今回取り上げた論文のなかで友人関係を中心テーマに掲げていたもので今後の研究につながる可能性が高いものとしては小田(2003)の研究を挙げることができる。前述したように、小田は友人関係を関係の内容と親密さの程度により7つに分類している。このように、具体的に友人関係を規定したうえで、友人関係を中心に置いた研究が今後求められる。

(引用文献)

- 1) 浅川達人・古谷野亘・安藤孝敏・児玉好信, 1999, 「高齢者の社会関係の構造と量」『老年社会科学』21(3): 329-338
- 2) 浅川達人, 2003, 「高齢期の間関係」古谷野亘・安藤孝敏編『新社会老年学—シニアライフのゆくえ』株式会社ワールドプランニング, 109-122.
- 3) 大森純子, 2005, 「前期高齢女性の家族以外の身近な他者との交流関係に関する質的記述的研究」『老年社会科学』27(3): 303-313.
- 4) 小田利勝, 2003, 「都市高齢者の友人関係に関する一考察」『神戸大学発達科学研究紀要』10(2): 491-502.
- 5) 河合千恵子・下仲順子, 1992, 「老年期におけるソーシャル・サポートの授受: 別居家族との関係の検討」『老年社会科学』14: 63-72.
- 6) 小林江里香・杉原陽子・深谷太郎・秋山弘子・Jersey Liang, 2005, 「配偶者の有無と子どもとの距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果」『老年社会科学』26(4): 438-450.
- 7) 古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・横山博子・松田智子, 1995, 「都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因」『老年社会科学』16: 115-124.
- 8) 古谷野亘・安藤孝敏・浅川達人・児玉好信, 1998, 「地域老人の社会関係にみられる階層的補完」『老年社会科学』19: 140-150.
- 9) 古谷野亘・西村昌記・安藤孝敏・浅川達人・堀田陽一, 2000, 「都市男性高齢者の社会関係」『老年社会科学』22(1): 83-88.
- 10) 古谷野亘・西村昌記・矢部拓也・浅川達人・安藤孝敏, 2005, 「関係の重複が他者との交流に及ぼす影響—都市男性高齢者の社会関係—」『老年社会科学』27(1): 17-23.
- 11) 古谷野亘・矢部拓也・西村昌記・高木恒一・浅川達人・安藤孝敏, 2007, 「地方都市における高齢者の社会関係—気心が知れた他者の特性—」『老年社会科学』29(1): 58-64.
- 12) 玉野和志・前田大作・野口裕二・坂田周一・中谷陽明/Jersey, L., 1989, 「日本の高齢者の社会的ネットワークについて」『社会老年学』30: 27-36.
- 13) 西下彰俊, 1987, 「高齢女性の社会的ネットワーク: 友人ネットワークを中心に」『社会老年学』26: 58-70.
- 14) 西村昌記・石橋智昭・山田ゆかり・古谷野亘, 2000, 「高齢期における親しい関係」『老年社会科学』22(3): 367-374.
- 15) 野口裕二, 1991a, 「高齢者のソーシャルサポート: その概念と測定」『社会老年学』34: 37-48.
- 16) 野口裕二, 1991b, 「高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート」『老年社会科学』13: 89-105.
- 17) 野邊政雄, 1999, 「高齢者の社会的ネットワークとソーシャルサポートの性別による違いについて」『社会学評論』50(3): 99-115.
- 18) 野邊政雄, 2005, 「地方小都市に住む高齢女性の社会関係における階層的補完性」『社会心理学研究』21(2): 116-132.
- 19) 原田謙・浅川達人・斉藤民・小林江里香・杉澤秀博, 2003, 「インナーシティにおける後期高齢者のパーソナル・ネットワークと社会階層」『老年社会科学』25(3): 291-301.
- 20) 広田すみれ, 2003, 「農村居住高齢者のコミュニケーション: ネットワークの分析」『社会心理学研究』19(2): 104-115.
- 21) 前田尚子, 1988, 「老年期の友人関係: 別居子関係との比較検討」『社会老年学』28: 58-70.
- 22) 前田尚子, 2004, 「友人関係のジェンダー差」『老年社会科学』26(3): 320-329.
- 23) 柳信寛, 2001, 「パーソナルネットワークの変容とライフコース—男性高齢者における定年退職の影響—」『総合都市研究』76: 115-127.
- 24) 矢部拓也・西村昌記・浅川達人・安藤孝敏・古谷野亘, 2002, 「都市男性高齢者における社会関係の形成—知り合ったきっかけとその後の経過—」『老年社会科学』24(3): 319-326.
- 25) Cantor, Marjorie H., 1979, "Neighbors and friends: An overlooked resource in the informal support system," *Research on Aging*, 1(4): 434-463.
- 26) Litwak, E & I. Szelenyi, 1969, "Primary group structure and their functions: Kin, neighbors and friends," *American Sociological Review*, 34(4): 65-481.

(本稿は、野邊の指導のもとで大須賀が執筆した論文に、野邊が若干の修正を加えたものである。)